

植	物	
防	疫	
講	座	

虫害編-41

オウトウに発生する主要な害虫の生態と防除

山形県病害虫防除所 伊 藤 慎 一

はじめに

オウトウは開花から収穫までの日数が50~70日程度と短く、生育期間中に問題となる害虫種はリンゴなどの他樹種に比べて少ないといった特徴がある。一般的なオウトウ栽培では、5月下旬ころから収穫が終了する7月上旬ころまで雨よけ被覆資材を設置し、果実着色期以降には地表面に光反射シートを敷設するため、梅雨期には雨が当たらず高温乾燥環境になりやすい(図-1,2)。特に‘紅秀峰’のような晩生種では、収穫間際にナミハダニの多発生が問題となる場合が見られる。また、収穫期の果実はオウトウショウジョウバエの加害を受けやすいため、オウトウ生産者は防除対策の徹底を図っている。

山形県の2021年のオウトウ結果樹面積は2,800 ha、収穫量が9,160 tと全国の65.7%を占めている。本稿では、山形県のオウトウ栽培における主要な害虫(ナミハダニ、オウトウショウジョウバエ、果樹カメムシ類、ミダレカクモンハマキ、コスカシバ、ウメシロカイガラムシ)の発生生態と防除対策について解説する。



図-1 オウトウの雨除け被覆資材設置の様子
(山形県病害虫防除所より提供)

I ナミハダニ *Tetranychus urticae*

オウトウを加害するハダニ類の主要種はナミハダニであり、防除圧の低い圃場ではまれにオウトウハダニ *Amphitetranychus viennensis* が発生する場合がある(図-3)。オウトウにおけるナミハダニの一般的な生態は、粗皮下などで越冬した雌成虫が早春に下草類で増殖し、5月中旬ころに樹のヒコバエや主幹部の徒長枝葉に移動して増殖する。ナミハダニは卵から成虫になるまでにかかる日数が、20℃恒温条件で19日程度、28℃恒温条件では8日程度と増殖力の高い虫である(江原・真梶, 1975)。徒長枝葉で増殖したナミハダニは、新梢葉へ移動して増殖しながら樹全体に広がっていき、オウトウでは雨よけ被覆設置後1か月程度経過したころから発生が問題となる場合が多い。ナミハダニの加害を受けた被害葉は、葉脈間が白く抜け、激しい加害を受けると黄化して早期に落葉する(図-4)。ナミハダニによる加害と褐色せん孔病の発病が重なった場合には、より著しい落葉になる。

また、ナミハダニの雌成虫は季節で体色の変化し、夏



図-2 反射シート敷設の様子(山形県病害虫防除所より提供)

Ecology and Management of Key Pests on Cherry in Yamagata Prefecture. By Shinichi Iro

(キーワード: オウトウ, 害虫, 生態, 防除)